

## 第一席 裁判員制度の投票力指数による分析



■佐々木宏夫ゼミ  
岩崎 康平

### 執筆動機

私がこの論文を執筆した動機は、大学における勉強の集大成として、その成果を形にしたかったからです。特にゼミにおいて学んだことを現実の問題に応用し、それを論文としてまとめたいという思いがありました。

そしてその論文を懸賞論文に投稿した動機は、自分の研究を客観的に評価していただきかったからです。学部生にとって自分の論文を評価していただく機会は

そう多くなく、懸賞論文はそのような貴重な機会でした。

### 論文の内容

平成21年5月に裁判員制度は開始され、国民が裁判員として実際に裁判に参加するようになりました。私はまず、裁判員制度において量刑等を決定する投票システムを数学的に定式化しました。その上で、裁判官と裁判員が投票の結果に対してそれぞれどのような影響力を持っているのかを、投票力指数という概念を用いて明らかにしました。裁判員制度は平成24年5月に制度の見直しが予定されており、その際にこの研究が少しでも役立つことを願っています。

### 執筆に当たったのエピソード

この論文に関する研究は4年生の始めから行い、11月頃には論文の内容は決まっていたいました。しかし実際に論文を書き

始めると、直すべき点が多く、なかなかはかどりませんでした。

私が論文を執筆することができたのは、研究する場を与えてくださった佐々木先生のおかげです。この場を借りて感謝の意を表させていただきます。また、数学の勉強に付き合ってくださいました大学院生の方々にも感謝しています。

### 後輩の皆さんへのメッセージ

商学部には研究をしようという意欲を持った学生が少ないように私は感じています。懸賞論文はそんな商学部において、意欲をもった学生が論文を競い合う素晴らしい機会であると思います。一学生がこのようなことを言うのは生意気ですが、商学部を去る先輩として申し上げておきたかったのです。皆さんが積極的に懸賞論文にチャレンジすることによって、懸賞論文、延いては商学部の研究の水準が向上することを心より祈っています。

## 第二席 IPO における株価のアンダーパフォーマンス現象について



■大村敏一ゼミ  
野津 大介

### 執筆動機

私が懸賞論文に応募しようと考えた理由は2点あります。第1に、前年に同じゼミの先輩が懸賞論文で第二席を受賞し、私も同じような賞を取りたいと考えたからです。第2に、学生最後の一年間で、形のある成果を出したいと考えたからです。大学時代において、形のある成果を出すことは難しいと考えられますが、懸賞論文では目に見える形で成果が表彰されることから、このように考えました。

### 論文の内容

新しく株式市場に上場した企業において、多くの企業の株価が、初値をピークに減少するというアンダーパフォーマンス現象が存在します。ただ、アンダーパフォーマンス現象の原因は、ファイナンス理論ではわからないものとして扱われています。そこで、アンダーパフォーマンス現象の原因を明らかにしようとした論文が私の執筆した論文になります。

### 執筆に当たったのエピソード

もっとも苦労した点は、「論文の文章を書く」ということです。論文では、分析が終了すると、文章を執筆します。私は文章を書くことが苦手だったため、ここに大きく時間を割かれました。担当教授である大村教授とは、年末年始も含めて何度

も論文の添削をしていただき、論文の構成や文章の書き方などを修正しました。その結果、最終的に論文が完成したのは、懸賞論文応募締め切りの当日2時間前になりました。

### 後輩の皆さんへのメッセージ

懸賞論文に応募することの一番の利点は、「自分の努力したことが目に見える形でわかる」という点です。学生時代において、自分の努力したことが目に見える結果に表れることはなかなかないように思えます。ですので、みなさんもぜひ懸賞論文に応募してみてください。応募して賞をとることが出来たときの達成感は何にも代えることのできない充実感となってみなさんの自信につながると思います。